

異なる言語を話す人が1つのコミュニケーションの場を形成する時どのような言語的手段があるかについての類型論的考察

——特にアフリカの事情に注目して——

梶 茂 樹

要 旨

世界には言語は多く、また概してそのサイズは小さい。一定の地域、あるいは一つの国の内部に多くの言語が話されていることも稀ではない。そういう場合、人々はどのように多言語状況に言語的に対処しているのだろうか。本稿は、その言語的手段を類型論的に考察するものである。類型論的には様々な方法があることがわかる。そこで重要なことは、一つのコミュニケーションの場を構成する構成員全員がコミュニケーションを成立させるためには、その全員が話されている内容を理解しなければならないということである。そのためには全員が理解する言語を一つ持つことが最も基本的で、またやりやすいことである。多言語地域において、地域共通語や公用語を定めるということは、用いる言語を一つにするということである。またウガンダ西部のように、地域共通語がないか、あっても十分機能しないところでは、地域の住人全員が多言語使用者となり、それぞれの言語領域では、そこに住む全員がその土地の言語を話すということで一言語状態を達成しているところもある。さらに、通訳を用いるということは、結局のところ、自分が用いる言語を一つにするということにほかならない。稀にベルギーのように、オランダ語とフランス語の2言語が通訳なしで用いられるところもあるが、そういう場合は、コミュニケーションの場を構成する全員が完全な2言語話者である必要がある。

キーワード：多言語使用、一言語状態、コミュニケーションの場、地域共通語、アフリカ

1. はじめに

日本のように、国中どこに行っても自分たちの言語が通じるような国は世界的に見てそう多くはない。ただ近年、世界の様々な国から人々が日本に来るようになり、街のあちこちで外国人を見かけたり、また外国語を耳にするようになってきた。駅や電車の中の案内も、単に英語のみならず、中国語（漢語）や韓国語のものも増えてきた。このような外国人の流入が続けば、はたして、現在の“どこに行っても日本語が通じる”という状況が保持できるのかと不安になる人もいるかもしれない。

本稿の目的は、こういった日本国内の状況を意識しつつも、直接的にこの問題を論じることにはせず、多言語状態が常態化しているアフリカやヨーロッパの例を引き合いに出しながら、違う言語を話す人々が、言語の壁を越えてコミュニケーションを行おうとする時、どのような言

語的手段があるかを類型論的に論ずることにある。

多言語使用に関する議論、特にアフリカの多言語使用に関する議論では、今まで筆者を含め、地域共通語の役割を強調するものが多かった(梶 2005, 2007, 2009a, 2009b など)。しかしながら、地域共通語がない、あるいは、あってもほとんど機能していない地域もある。例えば、筆者が 2001 年から調査をしているウガンダである。3.4.3 節で述べるようにウガンダには公用語としての英語とスワヒリ語はあるのだが、これらが国民の言語的コミュニケーションの手段として十分機能しているとは言い難い。そういう場合、人々は多言語状況に日々どのように言語的に対処しているのかということについて、今までほとんど議論されることがなかった。本稿は、その反省の意味も込めている。多言語状況に対する言語的対応の仕方には様々なものがあり、本稿では、それを類型論的にパターン化して提出してみたい。

なお、異なる言語を話す人々がいても、そこにコミュニケーションをする意志がなければ、何の言語的問題も生じない。またコミュニケーションをするとしても、言語を用いない場合もある。本稿では、こういった場合は論じない。あくまでも言語を用いてコミュニケーションをする場合のみの対処法を考察の対象とする¹⁾。

2. 通訳を用いる場合

異なる言語を話す人が言語を用いてコミュニケーションを行う場合、1 つのやり方は通訳を用いることである。日本の首相とアメリカの大統領が会談する場合、それぞれに通訳がつく。この場合、通訳は 2 人であるが、多くの場合、通訳は 1 人であろう。いずれにしても、それぞれの人は自分の言語で話し、そして自分の言語で聞く。相手の言語を知っている場合もあろうが、ここでは考慮外である。

これを模式化すると、(1) と (2) のようになる。(1) は通訳が 2 人いる場合、(2) は通訳が 1 人の場合である。ローマ字の大文字は、特定の民族あるいは言語を表す。そして、その小文字はその民族の個人である。例えば a は A 民族の A 言語を話す個人である。従って aA という表記は A 民族の人間 a が自分の言語 A を話すということを示す。A 民族の人間 a が B 民族の言語 B を話すということも、以下で述べるようにしばしば生じるが、ここでは A 民族の人間 a は本来的に A 言語を話すと模式的に考えておく。aA と同様に、bB も B 民族の人間 b が自分の言語 B を話すということを示す。上の例で言えば、日本の首相は aA で、アメリカの大統領は bB である。日本側の通訳は AaB である。つまり、A 民族の人間 a が自分の言語 A と相手の言語 B を話す。通訳 AaB は、A 民族の人と話す時は A の言語を用い、B 民族の人と話す場合は B の言語を用いる。AaB のように A、B を個人 a の左右に配置してあるのは、aA の人とは A 言語を用い、bB の人とは B 言語を用いるため、相手と向き合うようにしてある。これが (1a) が示すことである。(1b) は B 民族側の通訳が関与する場合である。bB はもっぱ

ら自分の言語 B を話し、それを通訳 AbB が言語 A を用いて、もっぱら言語 A を話す aA に伝える。(1) は (1a) と (1b) に分けてあるが、コミュニケーションの場は 1 つである。

- (1) a. aA → AaB → bB
 b. aA ← AbB ← bB
 (2) a. aA ⇄ AaB ⇄ bB
 b. aA ⇄ AbB ⇄ bB
 c. aA ⇄ AcB ⇄ bB

(2) は通訳が 1 人の場合である。3 通りの場合がある。(2a) は A 民族の人間 a が通訳する場合である。そして (2b) は B 民族の人間 b が通訳する場合である。ここでも (1) 同様、AaB と AbB が通訳として関与するが、(1) では AaB と AbB は同じコミュニケーションの場にいるのに対して、通訳が 1 人の場合は、(2a) と (2b) は別の場であるから、AaB と AbB は同じ場所にはいない。(2c) の場合は、A 民族でも B 民族でもない第 3 の民族 C の人間 c が通訳をする場合である。例えば、韓国人 aA とアメリカ人 bB が話をする場合、日本人 AcB が韓国語と英語の通訳をするような場合である。もちろん、この場合、aA と bB の間に何らかの共通の言語があれば、それを用いるだろうが、ここは通訳が介在する場合を考えている。

通訳が多数絡む場合もある。例えば EU (欧州連合) の会議である。EU の公用語は、現在ドイツ語、フランス語、スウェーデン語、ブルガリア語など 24 あり、加盟国の閣僚が参加する公式の会議などでは、原則すべての公用語に通訳される。また文書に関しても、公共性の高い重要文書はすべての公用語に翻訳される。しかしながら、会議や文書は多く、コストを考えれば、すべてのものを翻訳・通訳するわけにはいかない。もちろん、これだけが理由ではないが、そういうことも 1 つの契機として、EU 委員会はすべての EU 市民が母語以外に少なくとも 2 つ以上の言語を使うようになることを目標にしている (European Commission)。これが EU の多言語主義 (multilingualism) と呼ばれるものであるが²⁾、この方法は、多言語状況を 3.4.2 節で述べる水平的多言語使用で乗り切ろうとする政策である。私見だが、この方法には限界があるように思う。1 人の人が十分に使えるようになる言語は、せいぜい 3 つ 4 つで、10 も 20 もの言語にこれで対応することはできない。

3. 通訳を用いない場合

本稿の主眼は、多言語状況の中での通訳を介さない言語的コミュニケーションの在り方である。筆者は、Kaji (2013b) において表 1 のような類型を提出した。これは、アフリカ、特にウガンダ西部での社会言語学的調査をベースに考案したものである。本稿ではこれをベースに、他

地域の例も交え考察を進めたい。

表 1. 4つの共通語タイプ (Kaji 2013b)

1.	$a \rightarrow A \leftarrow b$:	a speaking his own language A with b
2.	$a \rightarrow B \leftarrow b$:	a speaking the other person b 's language B
3.	$a \rightarrow AB \leftarrow b$:	both a and b speak their own languages A and B
4.	$a \rightarrow C \leftarrow b$:	a and b speak a third language C

3.1. $a \rightarrow A \leftarrow b$

まず、表1の第1のタイプ ($a \rightarrow A \leftarrow b$) から見て行こう。これはA民族の人間 a がB民族の人間 b とコミュニケーションをする場合、自分の言語 A を用いる場合である。相手 b が、自分の言語 A を理解するということが前提となっている (a , b はそれぞれ aA , bA と表記できる)。この場合、自分の言語が相手の言語に似ていて相互理解が可能な場合も、全く似ていない場合もある。例えばアメリカ人 a が日本人 b と話をする場合、日本人 b が英語を知っていれば相互理解可能である。日本語と英語はまったく似ていないが、相手が英語を知っていればコミュニケーションに問題はない。ウガンダの例だと、ニョロ人 a が隣の民族グング人 b と話をする時、自分の言語 A 、すなわちニョロ語を用いるような場合である³⁾。ニョロ語はグング語と多少似ているが、お互いが自分の言語を用いて相互理解することはできない。こういった事例は世界にあふれている。その場合の言語の選び方には、多くの場合、言語の力関係が作用する。例えばアメリカ人と日本人が話をする場合、日本語を用いるよりは英語を用いる場合の方が多いであろう。またウガンダのニョロ人とグング人が話をする時も、ニョロ人がグング語を用いるよりも、グング人がニョロ語を用いることの方が普通である。これはこの地域ではニョロ語の方がグング語よりも優勢であるからである。

しかし、ここでもう1つ重要な要素が絡んでくる。それは、コミュニケーションの場所がどこであるかという点である。この点が次節のパターンに関係する。

3.2. $a \rightarrow B \leftarrow b$

表1の第2のタイプ ($a \rightarrow B \leftarrow b$) は、第1のタイプを逆の立場から見たものである。すなわち、アメリカ人 a が日本人 b と話をする場合、 b の言語すなわち日本語を用いる場合である (a , b はそれぞれ aB , bB と表記できる)。アメリカ人はどこでも英語を話すということが言われるが、日本に長く住むと日本語を話すようになるし、また短期滞在であっても、日本にいるならば日本人は日本語を話すように仕向けることがある。先のニョロ人とグング人の場合でも、もしニョロ人がグング人の領域で活動するとなれば、ニョロ人もグング語を用いざるを得なくなってくる。あるいはグング語を用いる方が有利になってくるということがある。つまり、自分の領域では自分の言語を話す、相手の領域では相手の言語を話すというパターン

である。この言語的態度は、ウガンダのように多言語地域でありながら地域共通語がほとんど機能しないところではよく見られるパターンである。この点は重要なポイントなので、4節で詳しく述べる。

3.3. $a \rightarrow AB \leftarrow b$

表1の第3のタイプ ($a \rightarrow AB \leftarrow b$) は、2人の言語の違う人が出会った場合、それぞれが自分の言語を話すというものである (a, b はそれぞれ aA, bB と表記できる)。これはウガンダのニョロ人とその南のトーロ人の場合のように、言語がお互い極めてよく似ており、強いて相手の言語を話す必要がないという場合が典型である。例えばニョロ人はバナナのことを *ekitô:ke* と言うがトーロ人は *ekitô:ke* と言う。SIL によればニョロ語とトーロ語の語彙的類似性は78% - 93% である (Lewis *et al.* 2015)。しかも、たんに同語源 (cognate) というだけでなく、意味も発音も方言的差しかない。ただ、それぞれ別の王国を形成しているので、お互い、自分の言語が相手の言語の方言と言われるのを好まない。

トーロ族の南に住んでいるアンコレ族⁴⁾の言語は、ニョロ族にとってトーロ語よりは離れているが、似ている要素も多い。筆者がウガンダ西部の町ホイマで社会言語学的調査をしている時、1人のアンコレ族の青年に出会ったが、彼はニョロ族の間で生活をしていながらニョロ語は話さずアンコレ語で通していた。ニョロ族はニョロ語で応える。これには、アンコレ語とニョロ語の似かよりに加えて、彼がホイマに来てまだ半年だという日の浅さに加えて、アンコレ人の一種の気位の高さが関係している。

それぞれが自分の言語を話すというのは、お互いの言語が相当違っていても起こりうる。例えばベルギーである。ベルギーにはフランス語とオランダ語とドイツ語の3つの言語が話されている。ただドイツ語域は東部のオイペンなど限られた地域のみであり、また人数も少ない。しかもドイツ語域はすべてフランス語域に含まれているので、ドイツ語人が例えば首都のブリュッセルに行った場合などは、多くの人は人前ではフランス語を話す。ドイツ語とオランダ語はよく似ているので、ドイツ語人 (特に低地ドイツ語を話す人たち) がオランダ語を話すこと自体は言語的にはそれほど難しいことではないが、オランダ語には心理的な抵抗があり、むしろフランス語を話すのを好むのである。従って、ベルギーは大きな括りではフランス語とオランダ語の2言語国ということになる。

フランス語とオランダ語は借用などを通じて共通の語彙項目はあるにせよ、相互理解性は極めて低い。オランダ語を知らないフランス語人とフランス語を知らないオランダ語人の会話はほとんど不可能である。しかしながら、ベルギーではフランス語人 (しばしばワロン人と呼ばれる) とオランダ語人 (= フラマン人) の会話は幾つもの場面で通訳なしで行われる。筆者が経験したのは王立科学アカデミーの会合である。

筆者は1994年にアフリカ言語学の泰斗 A. クーベ氏の推挙を受けてベルギー王立科学アカデ

ミーの海外会員（第1部）となった。1995年4月から1年間クーベ氏のもとでブリュッセルに滞在した折、しばしば王立科学アカデミーの会合に出席した。会合は2カ月に1回定期的にあり、そこでは、毎回、研究発表と事務的ミーティングがある。そして、それらはいずれも通訳なしでフランス語とオランダ語を使って行われるのである。つまり、フランス語人はフランス語のみを話し、オランダ語人はオランダ語のみを話す。フランス語で話しても質問はオランダ語で飛んで来るわけで、両方の言語をマスターしていないと会合には参加できない。恐らく両方できるということが会員になるための条件となっているのであろう（筆者のような海外会員は別）。王立科学アカデミーの正会員は、フランス語人の人数とオランダ語人の人数が決まっており、それぞれがお互いの威信をかけて、もっぱらフランス語かオランダ語のみの一方を使い続けるのである。

そういう筆者はフランス語はできるがオランダ語はほとんどできないので、オランダ語が飛び交っている時はほとんど理解できない。ある時、こういうことがあった。アントワープ大学のF.レインチェンス教授がルワンダの虐殺問題について講演した時であったが、彼はフラマン人（＝オランダ語人）であるのでオランダ語で話をする予定であった。しかし演台に立って私を見るなり、「今日は海外からのお客様がいるのでフランス語で話します。」と言って、フランス語で話し出した。あとでフランス語人の友人に聞くと、ああいう場でフラマン人がフランス語で話をするのは普通ではありえないということであった。

ベルギー人の誰もがフランス語とオランダ語の両方ができるわけではない。ブリュッセルのような2言語併用地域でもオランダ語しかできないというベルギー人は多くいる。逆にフランス語しかできないと思っていた人が極めて流暢なオランダ語を話すのに出くわすことも稀ではない。先ほどのA.クーベ氏であるが、彼自身フランス語人で私とはいつもフランス語で話していたので、私は特に彼が何語を話すかということは気に留めていなかった。また彼がオランダ語を話すのも聞いたことがなかった。ところが、ある日、テルビューレンにある王立中央アフリカ博物館の彼の研究室の横のコピー室で私と立話をしていた時、そこに1人の女子学生が入ってきた。そして彼に研究と事務的手続きのことについてオランダ語で質問したのである。その女子学生はオランダ語人であった。そして会話はオランダ語で5分ほど続いた。そして、その女子学生が出て行ったあと、クーベ氏は私の方を向いて肩をすくめるのであった。その時、私はやっと彼が完璧な2言語話者であることを理解した。実際、彼は王立科学アカデミーの正会員なのであった⁵⁾。

いま、お互いの言語が似ている場合と似ていない場合のことを述べたが、いずれもコミュニケーションが成立する場合である。お互いの言語が似ていても、ニョロ語とトー口語、あるいはアンコレ語ほど似ていない場合、上述のベルギー人のような特別なスキルがないと、コミュニケーションが成立しづらくなる。これも、私の経験であるが、学生時代、スペインの田舎町を旅行していてホテルに泊まった時のことである。チェックインを済ませて一息つきながら、部

屋のある2階のベランダから1階のロビーを眺めていた時、そこにイタリア人の夫婦が入ってきた。聞くともなしに聞いていると、夫婦はイタリア語しか話さない。そして受付の若い女性はスペイン語（カステーヤ語）しか話さないのである。スペイン語とイタリア語はどちらもロマンス系の言語で似てはいる。しかし違いも多い。例えばイタリア語では「なんですって?」と聞き返す時 *come?* と言うが、*come* はスペイン語では *comer* 「食べる」の2人称単数の命令形である。イタリア語の *come* はスペイン語では *como* である。些細なことではあるが、こうした違いのため、チェックインカウンターでは頓珍漢なやり取りがしばらく続いていた。

3.4. a → C ← b

表1の4番目のパターン (a → C ← b) は、異なった言語を話す個人 a と b が第3の言語 C を用いてコミュニケーションをするというものである (a, b はそれぞれ aC, bC と表記をできる)。これには2つのサブタイプがある。すなわち、何らかの意味で規定された共通語を用いる場合と、規定された共通語でない言語を用いる場合である。「何らかの意味で規定された共通語」というのには、公用語と地域共通語の2つの場合がある。

3.4.1. 公用語

「何らかの意味で規定された共通語」の1つのタイプは公用語 (official language) である。公用語とは、特定の集団・共同体内の公の場において用いることを公式に規定した言語のことである。次節で述べるが、国によっては、国や州の公用語が決まっていることがある。また裁判の公用語ということもある。我々が国際会議に出席した場合、そこでは会議に用いられる言語が公式に決まっている。多くは英語である。これにフランス語が加わることもある。かつては日本の大学で第二外国語といえばドイツ語という時代もあったが、今やドイツ語の国際的な場での影響力は著しく後退した。ドイツ人も国際会議では英語を話すことが多い。

3.4.2. 地域共通語を用いる場合

「何らかの意味で規定された共通語」の第2のタイプは、地域共通語 (lingua franca) である。これは例えばタンザニアやコンゴのスワヒリ語のような例である。その地域にしっかりと根を下ろして共通語として用いられている。

アフリカの多言語使用の問題を考えようと言う時、ほとんどの議論は、この地域共通語の役割の重要性を述べる。最初に述べた梶 (2005, 2007, 2009a, 2009b) などがそうである。地域共通語が多言語状態を乗り越える手段として使われるということである。確かに、この地域共通語というのは社会的に極めて重要な言語である。まずこれから見ていこう。

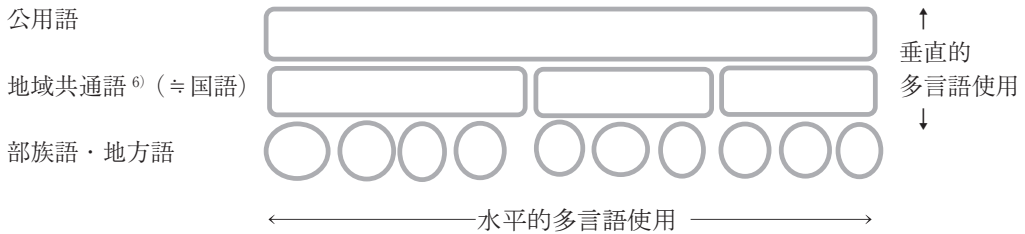
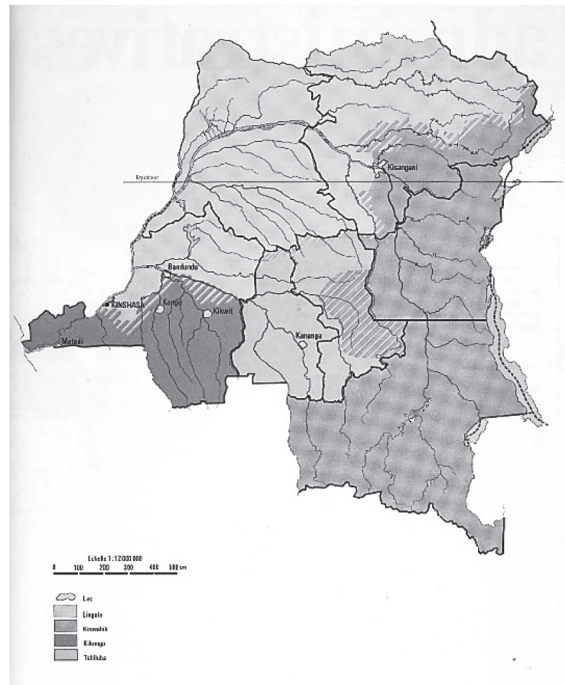


図 1. アフリカにおける多言語使用の概念図 (梶 2007, 2009a)

図 1 はアフリカにおける多言語使用の概念図である。全体を 1 つの国に見立てている（あるいは国の一部の地域と考えてもいい）。アフリカでは多くの国で、多数の言語が国内で話されている。しかし単に多く話されているだけでなく、言語が層を成して話されている。まず底辺に部族語 (tribal language)、民族語 (ethnic language)、地方語 (local language) などと呼ばれる言語がある。普通、人々はこれらのうち 1 つを母語にしている。ここで“普通”と言うのは、人によっては 2 つ 3 つの言語を母語にしている場合もあるし、またこれから述べる地域共通語を母語にしていることもあるからである。さらには、国の公用語と呼ばれる英語やフランス語などを母語にしている場合もある。部族語・民族語・地方語は、タンザニアでは 125 あるし、コンゴ民主共和国では 210 あると言われている (Lewis *et al.* 2015)。人々は多くの場合、自分の言語と周辺の言語を話す。これを筆者は水平的多言語使用と呼んでいる (梶 2007, 2009a)。同じ平面に話される言語を幾つか話すという意味である。

しかしながら、たとえ自分の言語以外に周辺言語を話すとしても、その地域のすべての言語を話すのは困難である。アフリカでは言語のサイズが小さく、車で 1 時間も走れば別の言語に出くわすことも稀ではない。例えば、週に 1, 2 回開催される市場では様々な言語を話す民族が集まって来る。そういう場合に機能するのが、地域共通語である。例えばコンゴ民主共和国では 4 つの大きな地域共通語が国を 4 分する格好で用いられている。すなわち、国の東部ではスワヒリ語、中南部はルバ語、北西部はリングラ語、そして西部はコンゴ語である (地図 1 参照)。面白いのは、この大きな地域共通語は国語 (national languages) と呼ばれることがあるということである。コンゴ民主共和国ではスワヒリ語、ルバ語、リングラ語、コンゴ語が憲法で国語 (langues nationales) と規定されている (Constitution de la République Démocratique du Congo 2006)。

国語が 4 つもあるというのは、日本人として馴染めないかもしれないが、それぞれの言語が地域に根差しているが故に 1 つにするのはなかなか困難である。どの言語を採っても他の地域の言語の話者が反対する。ただ、国によってはタンザニアのように、地域共通語がスワヒリ語 1 つという国もある。そういう場合は選択肢が他にないので問題は生じない。



地図 1. コンゴ民主共和国の4大地域共通語 (Jeune Afrique 1978)

アフリカには地域共通語は多く、アフリカのほぼ全域を覆っていると言っても過言でない。その中で、地域共通語には、部族・民族的基盤があるものとないものがある。例えば、コンゴ民主共和国の4大地域共通語であるが、スワヒリ語とリンガラ語は、部族・民族的基盤がない。すなわち、スワヒリ族、リンガラ族というのはいない。しかしルバ語とコンゴ語は、それぞれルバ族とコンゴ族の言語、すなわち、部族・民族語としてのルバ語とコンゴ語を基盤にして成立している。ナイジェリアのハウサ語、セネガルのウォロフ語などもそれぞれ、ハウサ族、ウォロフ族の言語をベースにしている。部族語・民族語としての言語と地域共通語は全く同じというわけではない。しかし部族語・民族語をベースとした地域共通語は、国の唯一の国語選択という場面では、部族主義を嫌う政治の中で不利に働くことがある。

3.4.3. 地域共通語を用いない場合

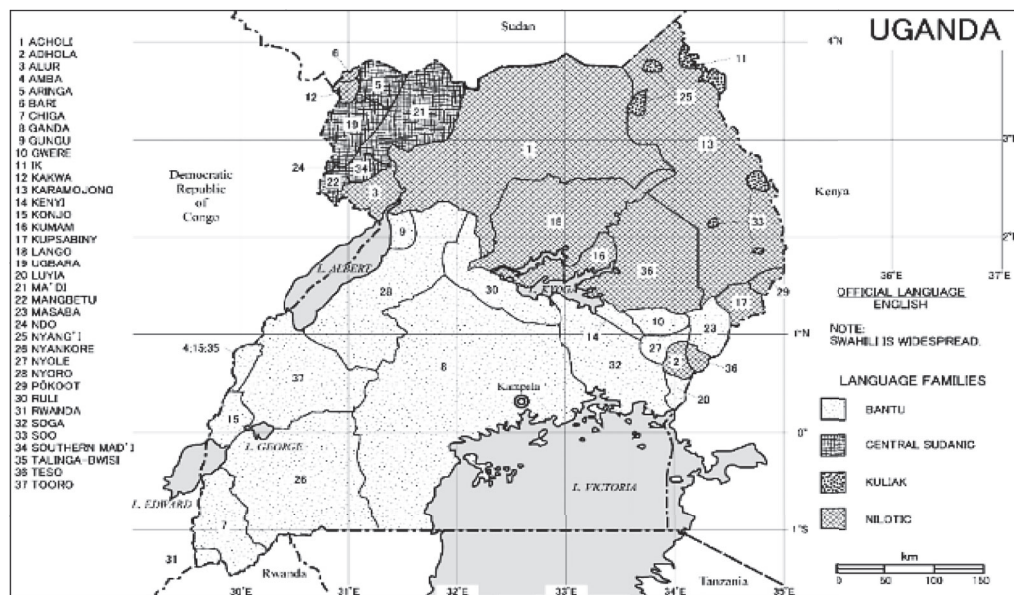
地域共通語の成立・確立にはヨーロッパ人の宣教師などが関与した場合もないではないが、それでも多くは、人々の不断の他民族との接触の中で成立した人類の英知の結晶とでも言うべきものである。その重要性は否定すべくもないが、残念ながら、少なくともアフリカ地域では、どこに行っても地域共通語があるわけではない。多くはないが、地域共通語のない地域もあるし、またあったとしてもほとんど機能していない地域もある。

例えば、ウガンダである。ウガンダは面積が24.1万平方キロで、ほぼ日本の本州と同じ面積

であるが、SIL (Lewis *et al.* 2015) によれば 41 の言語が話されている (地図 2 参照)。日本の面積は 37.8 万平方キロで、都道府県は 47 であるから、ウガンダの 1 言語あたりの平均領域は日本の都道府県よりやや小さいということになる。日本に当てはめれば、国内に 50 も 60 も言語が話されているということになる。そういうわけであるから、車で小一時間も走れば別の言語に出くわすということになる。もちろん人の行き来は活発であるから、各県の県庁所在地などでは様々な民族的・言語的背景を持った人が住んでいる。

そういう場合、3.4.2 節で述べた地域共通語があればコミュニケーションに問題はないが、残念ながら、ウガンダにはスワヒリ語と英語はあるのだが⁷⁾、国民的コミュニケーションの手段としては、ほとんど機能していない。例えばスワヒリ語であるが、首都のカンパラの町を半日歩いてもスワヒリ語が聞こえるのはほんの数回である。ほぼ全員が土地の言語であるガンダ語を話している。またホイマのような地方都市では、こちらがスワヒリ語で話しかければ反応する人はいるが、現地の人々がスワヒリ語を話すことは、まずない⁸⁾。

南部のバンツー語域でスワヒリ語がしばしば聞けるのは長距離バスの車内である。人々はバスの中で普通に携帯電話で話しているが、しばしばスワヒリ語が聞こえてくる。そういう場合、スワヒリ語を話す人の多くは軍隊や警察の関係者かコンゴ人である。ウガンダでも軍隊や警察の公用語はスワヒリ語であるので、その家族もスワヒリ語を話す人が多い⁹⁾。またコンゴ東部ではスワヒリ語は地域共通語として普通に用いられており、そういった人が国境を越えてウガンダに来ることも多いのである。ただコンゴ人のスワヒリ語はフランス語が混じるので聞いて



地図 2. ウガンダ言語分布 (Grimes 2000)。37 の言語が挙げられているが、2015 年度版 (Lewis *et al.* 2015) では言語数は 41 となっている。

いてすぐわかる。では、そういった状況の中で、人々は他言語の人たちと、どういったコミュニケーションの手段を取っているのでしょうか。これが次節で述べる「多言語使用による一言語状態」ということである。

4. 多言語使用による一言語状態

多言語使用による一言語状態というのは理論的には考えられるものであるが、現実に見かけることはあまりない。筆者もウガンダのホイマ市で初めて経験したことである。きっかけは、ホイマでニョロ語の言語調査をしていた時、街中もよく歩いていたのであるが、どこに行ってもニョロ語しか聞こえてこないののである。以前、調査のため住んでいたコンゴ東部では州都ブカヴに行けば、そこはシ族の土地でありながら、スワヒリ語も普通に用いられていた。スワヒリ語が地域共通語として機能していたのである。しかしウガンダのホイマではそうではない。ホイマはニョロ族の中心地ではあるが、ニョロ族でない人も多く住んでいるのにどうやってコミュニケーションを取っているのかということが、私にとって大きな謎であった。ニョロ族でない人といっても、私などは見ただけではわからない。そこで、住人が何語を話すかと言う社会言語学的調査を行うことにした¹⁰⁾。

道端、店の中、会社、自宅など場所を変え100人にインタビューした。その結果わかったことは、100人中78人がニョロ族で22人が他民族人であったが、インタビューした100人全員が多言語話者であるということであった。話すのは平均4.34言語であった。全員が多言語話者であるなら、街中でいろいろな言語が聞けていいはずなのに、どこに行っても聞こえてくるのはニョロ語だけなのである。

これを理解する鍵は、どこでコミュニケーションが行われるかという、その場所である。結論を言うと、何人であってもニョロ族の土地では原則ニョロ語を話すのである。逆にニョロ族は他の土地へ行けば、その土地の言語を話す。つまり地域の全員が多言語使用者であることによって、一定の地域では一言語状態が作り出されるのである。これを模式的に表したのが、図2である。

図2では、この地域に言語(部族語・民族語・地方語)がA, B, C, D, Eと5つ話されている。A言語地域(A部族の土地)には、当然ながら圧倒的にA部族の人間が多く、彼らは言語Aを話す。これをaAで表記し、A言語領域に多数配置してある。同様に、B言語地域(B部族の土地)には圧倒的に言語Bを話す人が多い。これをbBで表記し多数配置してある。以下同様である¹¹⁾。しかしながらA言語地域にはB族、C族、D族、E族の人たちも住んでいる。しかし彼らは、A言語地域では、自分たちの言語ではなく、言語Aを話す。これを、bA(A語を話すB族の人間)、cA(A語を話すC族の人間)、dA(A語を話すD族の人間)、eA(A語を話すE族の人間)として表す。もちろん数は多くない。重要な点は、何族であっても

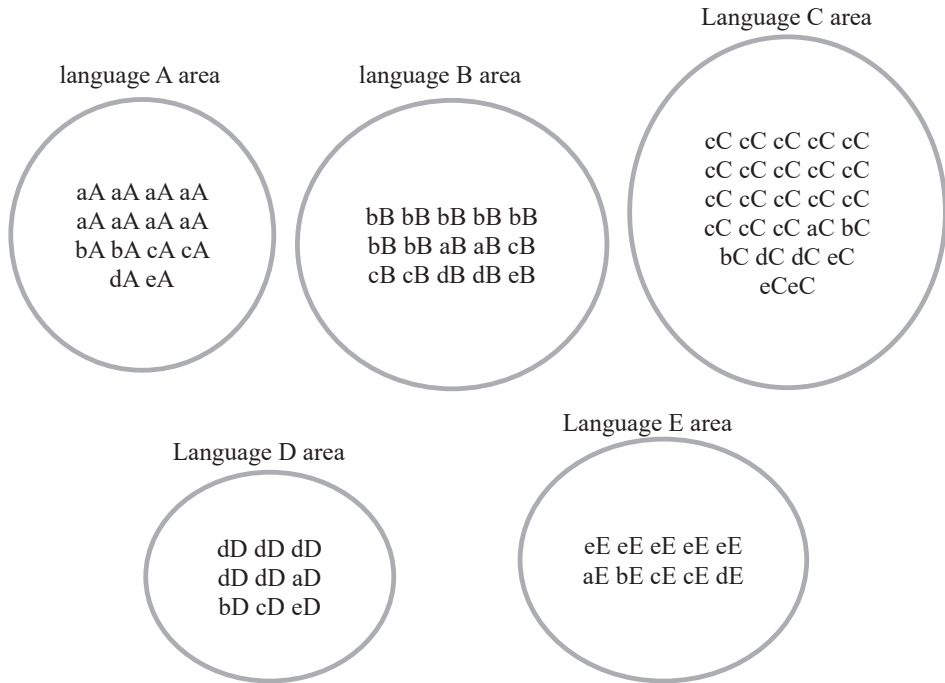


図2. 多言語使用による一言語状態の概念図 (Kaji 2013b)

A 族の土地では A 語を話すということである。これは、B 語領域においても同様である。B 語領域においても、話される言語は言語 B しかない。すなわち、繰り返しになるが、すべての人が多言語話者であることによって、A 言語地域、B 言語地域などの一定の土地では一言語状態が保たれるのである。これが筆者が言う「多言語使用による一言語状態」である。

4.1. 地域共通語でない共通語

多言語使用による一言語状態が示唆する重要な点が 2 つある。1 つは、地域共通語でない共通語という概念である。共通語というと、3.4.2 節で述べた「何らかの意味で規定された共通語」の 1 つである地域共通語をイメージする人が多い。しかしながら、言語は地域共通語となっていなくとも、地域で共通語として働くことがある。図 2 で述べた A, B, C, D, E の 5 つの言語は、すべて部族語・民族語・地方語であり、地域共通語ではない。しかし、A 言語地域では言語 A が共通語として機能しているし、B 言語地域では言語 B が共通語として機能している。これを、その地域での地域共通語と言ってもいいが、もしそういう言い方をすれば、すべての部族語・民族語・地方語は地域共通語であると言わねばならない。実際はそうではなく、これらは、言うなれば一時的あるいは暫定的な共通語である。

これがわかりやすいのは、例えば次のような場合である。ホイマで 100 人にインタビューしたが、彼らは平均 4.34 言語を話す (梶 2009b)。ということは、彼らは近隣そして遠方のすべて

の言語を話すわけではないということである。例えば、国の西部に住むニョロ人が東部のソガ人と話をする場合、ソガ語ができないということが生じる。ではどうするかと言えば、国の公用語である英語を用いたり、あるいはスワヒリ語を用いるという手もあるが、相手には英語もスワヒリ語も通じないということも多い。ではどうするかと言えば、多くはガンダ語を用いるのである。これはガンダ語が地域共通語として成立しているという意味ではない。ニョロ人にとってガンダ語は東隣の言語であるので知っていることが多く、またソガ人にとってもガンダ語は西隣の言語であるので知っていることが多い。つまりガンダ語がニョロ人とソガ人の一時的共通語となるのである。ルリ人とトーロ人が話をする時も、彼らの間のニョロ語が一時的共通語となることもある。この意味でウガンダではどんな言語も一時的共通語として機能しうるのである。これを表1に合わせて述べると、第4のタイプの言語Cには、地域共通語である場合と地域共通語でない場合の2つの場合があるということである。

4.2. 言語を1つにすることの重要性

多言語使用による一言語状態が示唆するもう1つの重要な点は、人がコミュニケーションを行う場合、全員が理解する言語を用いるということである。これは多くの場合、言語を1つにすることによって達成される。図1で示した「アフリカにおける多言語使用の概念図」における地域共通語であるが、これは地域の水平的多言語状態がコミュニケーションに支障をきたし、それを克服するために生じてきたのであり、そこにあるのはコミュニケーションには1つの言語を用いたいという欲求である。図2で示した「多言語使用による一言語状態の概念図」においても、基本にあるのは、認知された地域共通語がない場合でもコミュニケーションを行うには、用いる言語を1つにしたいという欲求である。2節で述べた通訳を使うというのも、コミュニケーションには1つの言語を用いたいという欲求から生じたものであろう。

なぜ、コミュニケーションに1つの言語を用いることが重要かと言えば、コミュニケーションの言語を1つにすることによって、その場に参加している全員にコミュニケーションに参加しているという安心感を与えるからである。知らない言語が用いられると、自分がコミュニケーションに参加していないという気持ちが生じる。昨今、日本で電車に乗っていると車内案内が、日本語のみならず、英語、中国語、韓国語などでなされるということが生じている。多くの日本人はそれらが理解できず、自分がコミュニケーションの場から外れているという疎外感を抱き、一種のいら立ちを覚えることもある。

全員が理解する言語を用いてコミュニケーションを行うという場合、コミュニケーションの言語を1つにするものの例外は、3.3節で述べたベルギーの2言語併用状態である。そこでは、コミュニケーションに参加する全員が、完璧な2言語話者でなければならない。これは特殊と言え特殊な例であるが、基本にある考えは、コミュニケーションの場を構成する全員が、そこで用いられる言語を共有するということであり、言語を1つにするというのは、むしろ、そ

の1例にすぎないとも言える。

4.3. 公的な場でのコミュニケーション

言語を1つにすることの重要性ということで気をつけなければならないのは、これは、私的な場ではなく公的な場でのコミュニケーションであるという点である。数人の友達、あるいは家族内で話をするという私的な場では、何語を用いても社会的な問題は生じない。しかし、人が集まる多少とも公的な場では、コミュニケーションの場を構成する全員がわかる言語を用いることが重要である。通常の場合は、全員がわかる1言語を持つことが、多言語状態の中でコミュニケーションが成立する大きな条件となってくる。例えば、コンゴのキンシャサ市のような多民族混住の街に住んでいるとする。人々は、家庭内ではモンゴ語やルバ語やレガ語など、それぞれ自民族の言語を話していて問題ないが、一歩外に出るとリンガラ語になる。キンシャサではリンガラ語が地域共通語なのである。

翻って、日本のことを考えてみよう。現代は日本人だけでなく韓国・北朝鮮、中国、ベトナム、タイ、ブラジルなど様々な出身の人たちが暮らしている。アフリカ人が日本で暮らすということも増えてきている。そういう場合、例えばブラジル人が家庭内でブラジル語を話しても何の問題も生じない。個人的なレベルに留まっているからである。しかし例えばマンションの住人会合で、それぞれの違った言語の人が自分の言語で話をしたらコミュニケーションは成立しない。通訳を使わないならば、共通の1言語を持つことが重要である。図1で示した地域共通語に当たる言語があれば理想である。それは現在では、コミュニケーションの場を構成する成員の多くが日本語を話す日本人であることを考えれば日本語以外には考えられないが、ただ、部族語・民族語としての日本語でいいかどうかは考える必要がある。地域共通語としてのコンゴ語やルバ語が、部族語・民族語としてコンゴ語、ルバ語をベースにしつつも、それを乗り越えて地域共通語として成立していることが示唆的である。

5. まとめ

本稿は、世界の幾つかの地域を見ながら、多言語状態の中で、どのような言語的手段を用いればコミュニケーションが成立するかを考察したものである。コミュニケーションの場においてコミュニケーションが成立するためには、何よりもコミュニケーションの場を構成する全ての人が、話されている内容を理解しなければならない。自分がその場においても話されている内容がわからなければ、コミュニケーションに参加していないと感じ疎外感を味わう。

そのためにはコミュニケーションの場を構成する全員が、その場で用いられるすべての言語を理解するのが理想である。ベルギーの王立科学アカデミーの会合のように2言語併用でも、その場のすべての参加者が完璧な2言語話者であるなら問題は生じない。しかしながら1つの

コミュニケーションの場を構成する全員が完璧な2言語話者で通訳なしでやり取りするというのは容易に実現できるわけではない。その場合、最も普通に行われやすいのは、コミュニケーションの言語を1つにすることである。通訳を用いるのは、自分の用いる言語を1つにすることである。また地域共通語や公用語も、一定の地域で用いる言語や特定場面での言語を1つにするためのものである。ウガンダ西部のように、地域共通語がない地域では、地域の全員が多言語話者であることによって、一定地域では1言語しか用いないようにする（つまり一時的共通語を用いる）というのも、コミュニケーションの場で用いる言語は1つにするということの現れと見ることができる。

注

- 1) また聴覚困難者など、いわゆる情報弱者に係るコミュニケーションの問題も重要なテーマであるが本稿では扱わない。
- 2) 欧州評議会 (Council of Europe) はこれを複言語主義 (plurilingualism) と呼んでいる。欧州評議会は、複言語主義とは話者の能力の問題で、一定の地域に複数の言語が存在すること表す多言語主義 (multilingualism) とは異なるとする (欧州評議会言語政策局 2016)。
- 3) ウガンダの言語分布に関しては地図2参照。
- 4) アンコレは、ニャンコレ、ンコレなどとも呼ばれる。
- 5) ベルギーの王立科学アカデミーは、一部 (人文・社会系)、二部 (理学・医学系)、三部 (工学系) に分かれていて、会員には正会員、准会員、海外会員の3つのカテゴリーがある。正会員、准会員、海外会員というのは、比喩的に日本の大学に当てはめれば、教授、准教授、非常勤講師といった感じである。
- 6) 梶 (2007, 2009a) では真中の層の言語を単に共通語としているが、ここでは言語の性格をはっきりさせるため地域共通語とする。
- 7) ウガンダでは憲法によって、英語は国の公用語、そしてスワヒリ語は第二公用語と規定されている (Constitution of the Republic of Uganda 2006)。
- 8) カンバラやホイマのような国の南部のバンツ語地域よりグルや西ナイルなどの北部のナイロート語地域の方がよりスワヒリ語が用いられている。南部バンツ語地域のニョロ人がスワヒリ語を用いるのは、特に北部人に対してであり、相手と通じ合える言語がない場合の最後の手段としてである。
- 9) ウガンダでは北部の方が南部よりスワヒリ語がよく聞かれるのは、伝統的に北部人が軍隊や警察の関係者に多いということと関連している。
- 10) 結果は梶 (2012), Kaji (2013a, 20013b) にまとめられている。以下の議論はそれらに基づく。
- 11) ここで aA, bB などの表記は、それぞれの言語領域で何語を用いるかという観点からのもので個人の能力を示すものではない。個人の能力ならば aABC, bABCD などがありうる。理想形は aABCDE, bABCDE などである。

参考文献

- Constitution de la République Démocratique du Congo 2006. https://fr.wikisource.org/wiki/Constitution_de_la_R%C3%A9publique_d%C3%A9mocratique_du_Congo.
- Constitution of the Republic of Uganda 2006. <https://www.wipo.int/edocs/lexdocs/laws/en/ug/ug002en.pdf>.

- European Commission "About multilingualism policy." https://ec.europa.eu/education/policies/multilingualism/about-multilingualism-policy_en.
- Grimes Barbara F. 2000. *Ethnologue* (Fourteenth edition). Dallas: SIL International.
- Jeune Afrique 1978. *Atlas de la République du Zaïre*. Paris: Editions Jeune Afrique.
- 梶 茂樹 2005. 「アフリカの多言語使用－特に東アフリカのSwahili 語圏の国語問題を中心に－」, 『アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態』(梶 茂樹・石井 溥編), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.3-16.
- 梶 茂樹 2007. 「アフリカの多言語使用と国語問題」, 『月刊言語』2007年1月号, 大修館書店, pp.62-67.
- 梶 茂樹 2009a. 「アフリカにおける言語と社会」, 『アフリカのことばと社会－多言語状況を生きるということ』(梶 茂樹・砂野幸稔編著), 三元社, pp.9-30.
- 梶 茂樹 2009b. 「コンゴ民主共和国の言語問題－多言語使用と教育用言語を巡って」, 梶 茂樹・砂野幸稔(編) 『アフリカのことばと社会－多言語状況を生きるということ』, 三元社, pp. 225-247.
- 梶 茂樹 2012. 「多言語使用による一言語状態－ウガンダ, ホイマ市における社会言語学的アンケート調査から－」, 『多言語主義再考－多言語状況の比較研究』(砂野幸稔編), 三元社, pp.595-633.
- Kaji, Shigeki 2013a. "Monolingualism via Multilingualism: A Case Study of Language Use in the West Ugandan Town of Hoima." *African Study Monographs* 34 (1), pp.1-25.
- Kaji, Shigeki 2013b. "Multi-language Use and Lingua Franca Use: Two Strategies for Coping with Multilingualism in Africa." *African Study Monographs* 34 (3), pp.175-183.
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig 2015. *Ethnologue: Languages of Africa and Europe* (Eighteenth Edition). Dallas: SIL International.
- 欧州評議会言語政策局 2016. 『言語の多様性から複言語教育へ－ヨーロッパ言語教育政策策定ガイド－』(山本 冴里訳), くろしお出版.

Typological Consideration of Linguistic Means when Speakers of Different Languages Form One Communication Arena with Particular Reference to the African Situation

Shigeki KAJI

Abstract

There are many languages spoken globally, but their extent is, on average, limited. Often, several languages are spoken in one area or country. In such cases, how do people manage multilingualism with linguistic means? This paper considers and lists the linguistic means typologically in such cases. Notably, all the participants of the communication arena must understand what is said to realize communication. The most essential and easiest means for that is to have one common language that all the participants understand. Establishing a lingua franca or an official language in a multilingual setting limits the number of languages used for communication to one. Even in areas such as western Uganda where there is a scarcely functional lingua franca, all the inhabitants are multilingual and use the local language in which they live, regardless of their native language. In this manner, monolingualism is realized in each language area. Furthermore, using interpreters is to allow speakers to communicate using only one language as a medium. In rare cases, two (or more) languages may be used without interpreters, e.g., Dutch and French in some Belgian situations. In such cases, all participants of the communication arena must be perfectly bilingual (or multilingual).

Keywords: multilingualism, monolingualism, communication arena, lingua franca, Africa

